

学生相談の取り組みの検討

—本学における大学不適應とは—

Examination of the Approaches about Student Counseling

—Study of Our College Adaptation—

中 島 絵 美

NAKAJIMA, Emi

1. はじめに

近年、大学進学率は増加傾向である。高校進学率は98%を超え、2012年度の文部科学省「学校基本調査」によると普通科高校卒業者の進路の53.6%は大学・短期大学に進学する。また、2009年の「青少年白書」でも、2005年度に大学・短大進学率が50%を超えた後右肩上がりに進学率が上がり、2008年度には進学率53.1%となる。2010年をピークに進学率は微減しているが、半数以上が大学・短期大学に進学する時代である。

一方で、2009年に読売新聞から出版された「大学の實力」の中で大学退学率が公表され、30%を超える退学率を有する大学の存在が知られる所になった。

しかし、退学率を公表し、問題意識を持つことで退学率の減少および大学適應の向上を果たした大学もある。そもそも、退学はそれ自体、必ずしも不適應の指標とは言えない。何か新たな目的のために決断する手段の一つでもある。とはいえ、何らかの不適應をきたし、授業の欠席が続き、やむを得ず休学や退学という選択肢を選ぶ学生も多い。退学の要因を探ることで、不適應の予防的措置を模索することができると思う。

例えば、本学の退学率は1年間の退学率は約10%（2010年度時点）であるが、「大学の實力」内に記載のある保育学科（本学の都道府県にある私大）の1年間の退学率の平均は3.26%（2010年度）である。本学の1年間の退学率は、他大学に比して高いことが分かる。また、本学の4年間の退学率は11%（2012年春学期終了時点）であり、上述の保育学科の4年間の退学率9%である。本学の春学期終了時点での11%という数値はやや高いと言えるだろう。

窪内（2009）が指摘した具体的な学生相談的アプローチを以下に4つ挙げてみる。

①正規授業の中で学生相談に対する具体的な学生相談的

アプローチ

②大学入学以前から新入生援助の開始

（AO入学者への学習支援を目的とする。大学の学力水準を維持するためには一般入試入学者の割合が30%以上必要だという見方があるため）

③入学後、できるだけ早期に授業欠席者や成績不良者を発見するシステムの構築

④成熟促進のためのグループワークの実施

本学では、これらのアプローチに多少のアレンジを加えながら取り組み始めている。

例えば、①に関しては、学生相談員が非常勤であることから正規授業の中で学生相談的アプローチについて、伝えていくことは難しいが、「オリエンテーション内の啓蒙活動」や「相談室開放」、「相談室便り」というイベント等を用いて学生たちにアナウンスを始めている。また、②～④までに学生相談室がどのように関わっていくかが、課題である。行っている取り組みは、拙稿「時代や学校の特色に応じた学生相談室の取り組みの検討—大学生不適應の予防的アプローチ—」の中で取り上げているため、本稿では新しく導入した不適應者早期発見のための調査について報告したい。

学生の質も変わり、学生の主体性に任せるだけでは大学運営が難しくなっている。一般論ではなく、本学に即した学生支援の方法を模索していきたい。

2. 調査目的

山田（2006）の調査の中で、尺度を用いたアンケートを実施することで、退／休学の早期発見に繋がりをいくつかの指標が示された。そのため、今回は以下の目的で調査を行った。

①気になる学生の早期発見

②大学適應について本学学生が抱く不安感についての把握

こども教育宝仙大学 学生相談室カウンセラー

3. 先行研究の結果

1) 「大学新生における適応感の検討」(山田 2006)

目的)

休学・退学に至る学生が大学新生の段階で、何に対して不安を抱いていたかを把握する。

調査対象)

① 2003年6月の新生対象に必修科目の講義中に「大学生活に関する調査」として実施。対象は情報系学科135

結果)

名、管理栄養士課程90名(計225名)。

意欲減退傾向尺度を使用。当日欠席を考慮し、1ヶ月追調査を実施。調査実施率は90.0%。

② 2004年6月の新生対象に必修科目の講義中に「大学生活に関する調査」として実施。

対象は情報系学科100名、社会科学系学科40名、管理栄養士課程93名(計233名)。

大学生活不安尺度を使用。当日欠席を考慮し、1ヶ月追調査を実施。調査実施率は95.1%。

表1 「退・休学者等の意欲減退度診断検査の結果」

No.	経過	主体的要因	大学環境要因	総合
1	1年前期で退学	16	7	23
2	1年前期で退学	調査未実施		
3	1年前期で退学	調査未実施		
4	1年前期で退学	23	8	31
5	1年前期で退学	調査未実施		
6	1年後期で退学	調査未実施		
7	1年後期で退学	10	9	19
8	1年後期で退学	15	8	23
9	1年後期で退学	23	8	31
10	1年後期で退学	調査未実施		
11	2年前期で退学	調査未実施		
12	2年前期で退学	10	3	13
13	2年前期で退学	14	4	18
14	2年前期で退学	17	7	24
15	2年前期で退学	調査未実施		
16	2年後期で退学	27	9	36
17	留年決定後、退学	調査未実施		
18	留年決定後、退学	調査未実施		
19	留年決定後、退学	21	6	27
20	留年決定後、退学	17	5	22
21	留年決定後、退学	調査未実施		
22	休学後、退学	調査未実施		
23	休学後、退学	21	8	29
24	休学後、退学	30	6	36
25	留年	24	9	33
26	留年	24	8	32
27	留年	16	3	19
28	留年	34	8	42
29	留年	調査未実施		

注) 表中の太字は、平均+標準偏差以上の高得点であることを示す

(山田 (2006)「大学新生における適応感の検討」p.33より引用)

表2 「退・休学者等の大学生生活不安尺度の結果」

No.	経過	日常生活	評価不安	大学不適	総合
1	1年前期で退学	4	8	5	17
2	1年前期で退学	調査未実施			
3	1年前期で退学	9	7	5	21
4	1年後期で退学	0	1	4	5
5	1年後期で退学	5	6	3	14
6	1年後期で退学	5	2	2	9
7	1年後期で退学	2	3	0	5
8	1年後期で退学	2	1	2	5
9	1年後期で退学	3	6	5	14
10	1年後期で退学	調査未実施			
11	1年後期で退学	調査未実施			
12	1年後期で退学	調査未実施			
13	2年前期で退学	2	4	0	6
14	休学	11	11	1	23
15	休学	4	4	4	12
16	休学	1	0	1	2
17	休学	8	7	1	16
18	休学後、復学	4	3	3	10
19	休学後、復学	12	9	1	22

注) 表中の太字は、平均+標準偏差以上の高得点であることを示す

山田 (2006)「大学新入生における適応感の検討」 p.35より引用

① 「意欲減退傾向尺度」の調査結果

- ・ 学科間に差は認められない
- ・ 調査未実施者が退学／休学者の約半数を占める
- ・ 退学／休学者の大学環境要因に関わる意欲減退傾向が高い（＝不適応感は主体要因ではなく、大学側の要因と認識している）
- ・ 留年者は総合的な意欲減退傾向が高い（＝退学までの行動が起こせない）

② 「大学生生活不安尺度」の調査結果

1. 情報系課学科（職業と直結しにくい学科）の日常生活不安、評価不安、総合得点において、一般の大学生の平均値よりも低くなっている
2. 退学／休学者は、情報系課学科＞管理栄養士養成課程である
3. 管理栄養士養成課程（職業と直結する学科）では、日常生活不安、評価不安、総合得点において、平均より高くなっている
4. 退学／休学者の調査未実施率が高い（全体の未実施率5%に比して、退学／休学者の調査未実施率は21%に及ぶ）
5. 大学不適応の不安得点が高いケースが退学／休学者の約半数に認められる

まとめ)

1.2.3. に関して

職業に直結しない学科の学生は、ある種の職業に直結する学科の学生に比べて、大学不適応尺度を除いて、不安が低い傾向にある。授業等の選択に幅がある分、自由に選択できるからこそ適応しやすい可能性がある。また、職業適性への自信の揺らぎが専門的学科の学生は抱きやすいことが考えられる。

一方で、不安の低さは意欲や動機づけの低さと関連するという見解もあり、不安の高い専門的な学科に比して、休学・退学率が高いのかもしれない。

4. に関して

退学・休学者の内訳として、1年の早期に連続した欠席がある学生の割合が高い。

5. に関して

退学／休学者の内訳として、「大学不適応」の不安得点が高い学生の割合が高い。なお、学科間の差異は認められなかった。

2) 「大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討」(藤井1998)

目的)

大学生生活において、どのような不安を抱いているかを

各学年および性差の比較を行う。

方法)

① 予備調査

項目を収集するために大学1年生から4年生まで各学年男女10名ずつの計80名を対象として、大学生が学生生活においてどのような不安を感じているかの自由記述の調査を行った。一人あたりの平均記述数は4.7個であった。その結果、64項目の大学生活不安項目が収集された。収集された項目について心理学関係の研究者が5名によって妥当性を数値化して評価した。評価得点が高い32項目を本調査で用いることとした。

② 本調査

32項目にMASで設けられている虚構尺度4項目を加えた36項目を用いて、関東地方にある国立大学と私立大学5校の大学生2782名を対象として“大学生活不安尺度”を実施した。また、合わせてその尺度の妥当性を調べるために日本版MAS、青年版TAI、CMI健康調査票を実施した。

③ 調査対象

学年別には、1年生862名(男:456名、女:406名)、2年生819名(男:278名、女:361名)、4年生501名(男:219名、女:282名)であった。

大学生活不安尺度の男女別得点分布は図1に示す通り。

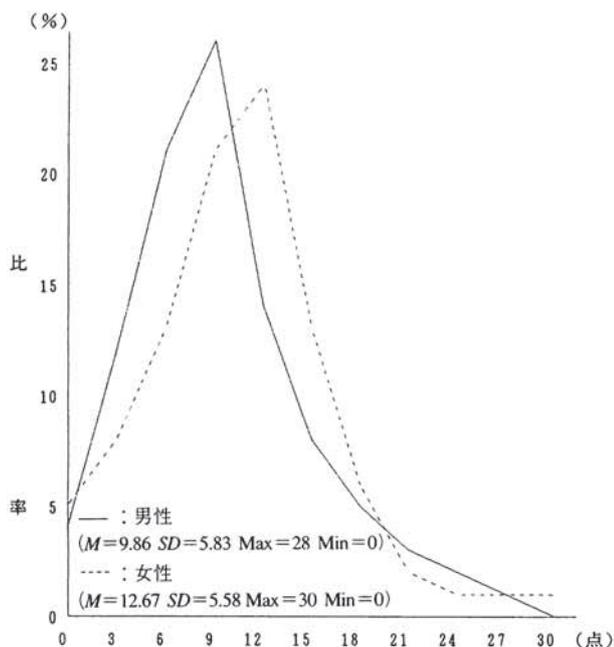


図1 「大学生活不安尺度の男女別得点分布」

藤井 (1998)「大学生活不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」(p443)より引用

④ 大学生生活の高不安項目

大学生活において学生が感じやすい不安を各項目における“はい”の反応率でみた。

結果)

- ・“卒業論文”(78%)、2“単位”(74%)、3“テスト”(70%)の順で不安を感じている。
- ・日常生活不安と評価不安に性差あり。いずれも男性<女性。(有意差あり)
- ・日常生活不安と評価不安には学年差あり。学年が上がるにつれて得点が下がり、3年生以上が1年生に比べて得点が優位に低かった。
- ・本尺度の合計得点についても性差と学年差が優位に認められた。
(男性<女性、1年>2年>3年>4年)

以上の先行研究を踏まえて、本調査の結果と比較したい。

4. 方法

1~4年生の在籍生を対象に履修率の高い授業内で調査を行った。当日欠席者のために、2~4年生は追調査を1度行っている。追調査時は、調査用紙を一齐に配布。調査未実施者のみ記入し、提出するように呼びかけた。

1) 調査用紙

藤井 (1998)による大学生活不安尺度を用いて、調査を行った。ただし、「サークルなど先輩たちと上手く付き合えるかどうか、心配である」の項目に対し、2、3年生は「先輩や後輩たちと」と一部追加し、4年生に関しては上級生がいないことから「後輩たちと」と一部変更を行った。

また、山田 (2006)は、休・退学者等の調査結果から、大学環境要因に関する意欲減退尺度の高さを指摘していたため、予備調査の一環として大学環境要因に関する意欲減退尺度の一部を無作為に抜粋し、調査用紙の最後に3項目加えている。

2) 調査対象

2012年度の在籍者、371名を対象に調査を実施した。各学年の内訳は以下の通りである。

1年生、在籍	100名
2年生、在籍	100名
3年生、在籍	94名
4年生、在籍	69名
計	363名

表3 「調査用紙 (1年生用)」

1年生

大学生活のためのアンケート

こども教育宝仙大学
 学生相談室

このアンケートは、学校生活をよりよく過ごすために活用するものです。
 大学生生活をよりよくするために、個人のアンケート結果を利用する時はその旨をご連絡します。
 連絡先として、携帯電話とメールアドレスのご記入をよろしく願いいたします。
 尚、アンケートの記入した個人の内容を活用する時には必ずご本人の許可を得てから使用します。

学籍番号	
氏名	

携帯番号	
携帯メールアドレス	

このアンケートは大学生生活について調査するものです。
 当てはまるものに○をつけてください。

1	大学で人が自分のことをどう思っているか、気になる	はい	いいえ
2	4年間で卒業できるかどうか、不安である	はい	いいえ
3	留年したらどうしようと気になる	はい	いいえ
4	万一事故にあったり、病気をしたらどうしようと心配になる	はい	いいえ
5	友達と一緒に何かをしなければならないとき、上手く協力できるか不安である	はい	いいえ
6	サークルなどで先輩達と上手く付き合えるかどうか、不安である	はい	いいえ
7	1限目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安である	はい	いいえ
8	何らかの団体に突然勧誘されないか、不安である	はい	いいえ
9	先生が近くにいと気になって仕方がない	はい	いいえ
10	1ヶ月の生活費が足りるかどうか、心配である	はい	いいえ
11	授業中、先生が言っている内容が分からず、不安になることがある	はい	いいえ
12	大学の先生と話をする時、とても緊張する	はい	いいえ
13	先生に“研究室まで来るように”と呼ばれたら、何を言われるかとても気になる	はい	いいえ
14	将来、よい就職ができるかどうか、不安である	はい	いいえ
15	授業中、何かしなければならぬとき、ミスをするのではないかと不安である	はい	いいえ
16	必修科目の成績が「不可」であつたら、どうしようと心配である	はい	いいえ
17	テスト中に時間が残り少なくなると自分の考えがまとまらなくなる	はい	いいえ
18	テストを受けていて、分からない問題に出会うと頭の中が真っ白になってしまう	はい	いいえ
19	成績のことが気になって仕方がない	はい	いいえ
20	大学の成績のことを考えると、憂鬱だ	はい	いいえ
21	履修登録した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配である	はい	いいえ
22	テスト中、緊張して自分の力が発揮できない	はい	いいえ
23	授業やゼミで発表する時、声が震えることがある	はい	いいえ
24	卒業論文、卒業研究がうまくできるかどうか、不安である	はい	いいえ
25	テストを受ける時、悪い点を取ってしまうのではないかと心配になる	はい	いいえ
26	こんな大学にいと、自分がだめになるのではないかと憂鬱になる	はい	いいえ
27	この大学にいと、何か不安な気持ちになる	はい	いいえ
28	できることなら、他の大学へ転学あるいは転部、転科したくて仕方が無い	はい	いいえ
29	入学した学部・学科が自分にあつていないような気がして不安である	はい	いいえ
30	大学を退学したいと思うことがある	はい	いいえ
31	私は現在在学している大学にかなり満足している	はい	いいえ
32	本当に信頼できる教授にめぐりあえない	はい	いいえ
33	大学内にもっと精神的な支えが欲しい	はい	いいえ

ありがとうございました。

3) 調査実施時期の手続き

- 1年生 必修に準じた授業内で実施。(5月)
- 2年生 オリエンテーション時と実習の授業(1回)に実施。(3月と4月)
- 3年生 オリエンテーション時と必修に準じた授業内で実施。(3月と4月)
- 4年生 オリエンテーション時と実習の授業(1回)に実施。(3月と4月)

1年生、96名実施。調査未実施者4名。実施率96%であり、内、有効回答数93件(96%)(M:21名、F:72名)。尚、無効回答3名は、2件法の「はい」と「いいえ」の中間に回答している。

2年生、90名実施。調査未実施者10名。実施率90%であり、内、有効回答数80件(80%)(M:21名、F:59名)。無効回答10名は無記入欄があったものが8名、回答欄の中間に回答したものが2名である。

3年生、78名実施。調査未実施者16名。実施率83%であり、内、有効回答数72件(77%)(M:22名、F:49名)。無効回答6名は無記入欄があったもの3名、回答欄の中間に回答したものの3名となっている。

4年生、42名実施。調査未実施者27名。実施率61%であり、内、有効回答数38件(55%)(M:9名、F:29名)。

無効回答4名は、無記入欄があったもの1名と回答欄の中間に回答したものの3名である。

全学年だと、306名実施。調査未実施者は57名。実施率84%であり、内有効回答数283件(78%)である。

尚、調査用紙には学籍番号を記入する欄があるため、再履修等の受講などで同一人物画2重回答していないか確認している。二重回答があった場合、最初の回答を採用している。

問題点)

- ・先行研究と同様の調査内容が行うことができなかった。(授業変更の関係のため追調査を実施することができていない。特に新1年生対象の追調査ができていない。)
- ・調査実施者が異なっている。教示の仕方が異なっている可能性がある。
- ・オリエンテーションと選択必修の授業となり、授業履修していない学生がいる可能性がある。
- ・4年生の学生相談室のオリエンテーションの前に多くの学生が帰ってしまった。
- ・空欄、回答欄の中間に回答した学生が多く、教示の仕方に問題があった可能性がある。

5. 結果

調査結果と先行研究の比較を以下に行う。

表4 山田(2006)の新1年生を対象とした調査結果

	情報系		社会学科系		管理栄養士		(大学1年生)	
	M (N=80)	F (N=20)	M (N=37)	F (N=3)	M (N=23)	F (N=70)	M (N=456)	F (N=406)
日常生活不安	4.88	4.7	4.33	5.67	6.09	6.79	5.07	5.41
標準偏差	2.7	3.29	3.06	—	3.24	3.31	3.37	2.78
評価不安	4.76	4.05	4.03	6	6.24	6.66	5.57	6.22
標準偏差	3.01	2.98	2.72	—	3.22	2.97	2.33	2.78
大学不適応	0.9	0.75	0.97	0.33	1.09	0.93	1.14	0.7
標準偏差	1.43	1.29	1.36	—	1.37	1.35	1.7	1.08
総合	10.54	9.7	9.38	12	13.43	14.38	11.79	12.33
標準偏差	5.7	6.07	5.17	—	5.95	6.37	5.7	5.06

表5 藤井（1998）「大学生生活不安尺度の各学年の平均値および標準偏差」

	大学1年生		大学2年生		大学3年生		大学4年生	
	M (N=456)	F (N=406)	M (N=278)	F (N=541)	M (N=239)	F (N=361)	M (N=219)	F (N=282)
日常生活不安	5.07	5.41	4.23	5.76	2.21	4.12	2.03	3.02
標準偏差	3.37	2.78	3.03	3.31	1.39	4.28	1.29	1.35
評価不安	5.57	6.22	3.77	6.33	3.3	3.86	2.05	2.99
標準偏差	2.33	2.78	2.45	2.48	2.21	2.61	1.31	1.84
大学不適応	1.14	0.7	1.23	0.97	1.3	0.71	0.93	0.54
標準偏差	1.7	1.08	1.36	1.33	1.71	1.5	1.02	1.33
総合	11.79	12.33	9.23	13.06	6.8	8.57	5.01	6.55
標準偏差	5.7	5.06	5.63	5.34	4.13	7.56	3.55	4.52

表6 本学における「大学生生活不安尺度の各学年の平均値および標準偏差」

	大学1年生		大学2年生		大学3年生		大学4年生	
	M (N=20)	F (N=74)	M (N=20)	F (N=65)	M (N=22)	F (N=70)	M (N=12)	F (N=30)
日常生活不安	6.38	6.78	6	5.85	5.77	5.82	6.78	5.17
標準偏差	3.31	3.67	4.07	3.74	3.42	3.03	2.05	3
評価不安	5.48	6.06	4.14	3.81	3.82	4.35	5	4.62
標準偏差	2.42	3.11	2.92	2.6	3.02	2.7	2.96	2.85
大学不適応	0.1	0.42	0.67	0.66	1.32	1.27	1.33	1.59
標準偏差	0.3	0.87	1.35	0.98	1.62	1.37	1.66	1.66
総合	12	13.3	10.81	10.32	10.91	11.43	13.11	11.38
標準偏差	5.43	6.46	7.23	6.33	7.06	5.74	5.82	5.3

表7 分散分析における学年差及び性差の結果

学年差	日常生活不安	n.s.
	評価不安	n.s.
	大学不適応	5%水準
	総合得点	n.s.
男女差	日常生活不安	n.s.
	評価不安	n.s.
	大学不適応	n.s.
	総合得点	n.s.

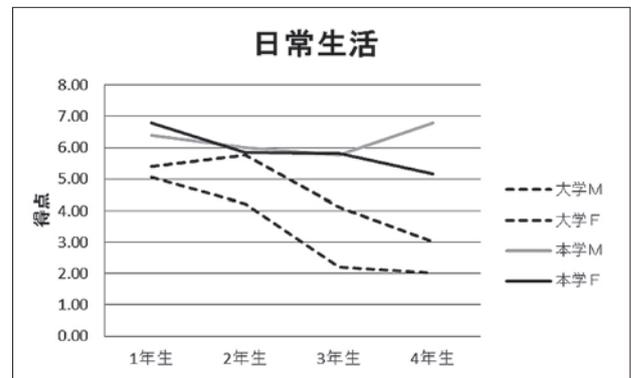


図2 本学と藤井（1998）の「日常生活不安」における学年差および性差の比較

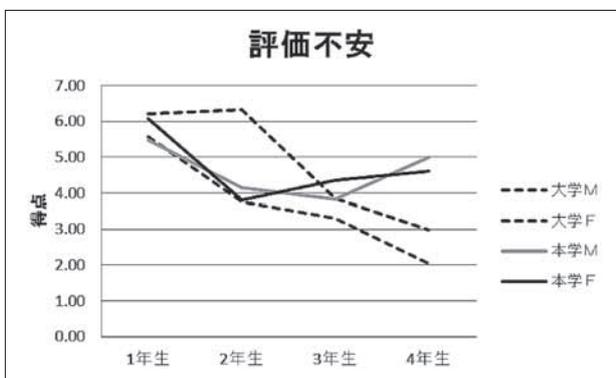


図3 本学と藤井（1998）の「評価不安」における学年差および性差の比較

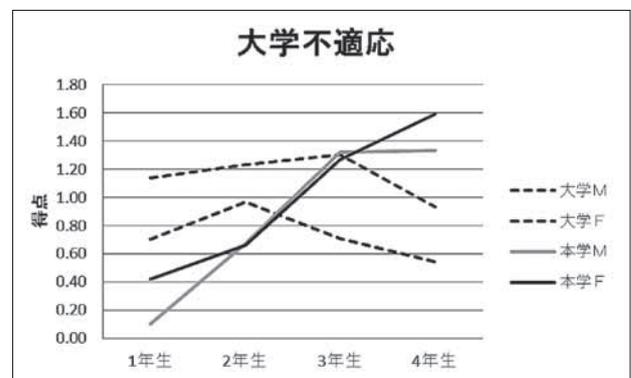


図4 本学と藤井（1998）の「大学不適応」における学年差および性差の比較

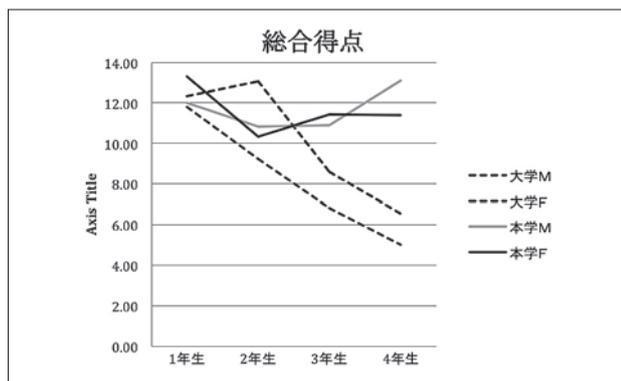


図5 本学と藤井(1998)の「総合得点」における学年差および性差の比較

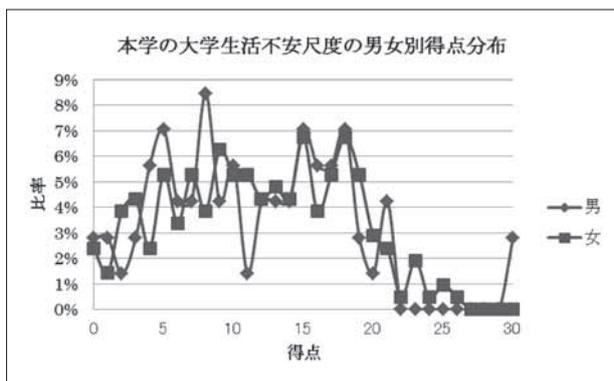


図6 本学の大学生生活不安尺度の男女得点分布

表8 本学の休・退学者等の大学生生活不安尺度の結果

No.	経過	日常生活	評価不安	大学不適	総合	意欲減退
1	1年前期で退学	調査未実施				
2	2年前期で退学	6	4	0	10	2
3	2年前期で退学	9	4	1	14	3
4	2年前期で退学	0	5	0	5	1
5	2年前期で退学	調査未実施				
6	3年前期で退学	15	10	5	30	3
7	4年前期で退学	調査未実施				
8	休学	調査未実施				

注) 表中の太字は藤井(1998)の平均+標準偏差以上の高得点であることを示す。

注) 網掛けは本学の平均±標準偏差以上の得点であることを示す。

注) 斜字は藤井(1998)及び本学の調査の平均-標準偏差以下であることを示す。

① 本学の特徴

本学は、1998年に藤井が行った“大学1年生”の不安尺度に比して、「日常生活不安」において、数値が高い(=不安である)が、「評価不安」に関してはほぼ同様の結果である。また、男子学生における「大学不適応」の不安の数値は上記の数値よりも低くなっている。(日常生活 M+1.31/F+1.37、評価不安 M-0.09/F-0.15、大学不適応 M-1.04/F-0.13)

ただし、山田(2006)の調査結果と比較すると、専門学科(管理栄養士)の比較において、本学の女子学生の「日常生活不安」は山田の研究ほぼ同様の数値を示しているが、本学の学生の「評価不安」及び「大学不適応」の不安尺度の数値は上記に比して低くなっている。(日常生活 M+0.29/F-0.01、評価不安 M-0.76/F-0.59、M-0.99/F-0.36)

ローデータでの比較ができないため、単純に数値で見ているので傾向を示すには根拠が弱い、可能性として本学の学生は一般の大学生に比して「日常生活不安」が高いが、専門学科の学生と比較すると「評価不安」及び「大学不適応」を感じにくい傾向があるのかもしれない。また、追調査を行っていないにもかかわらず、96%と

いう高い調査実施率は1年生の初期の段階での適応が他大学に比して上手くいっている可能性を示唆している。また、「大学不適応」の数値も他大学に比べ、低い傾向がある。専門学科(管理栄養士)と比較して、本学の1年生の「大学不適応」はM-0.99/F-0.36である。一般的な大学1年生の平均からもM-1.04/F-0.13であり、社会科学系の女子学生を除く、すべての大学1年生の平均値の中で最も低い値を示している。

ただし、通常学年が上がる毎に下がるはずの「日常生活不安」及び「評価不安」の値に本調査では有意差が認められなかった。唯一、有意差が認められたものは「大学不適応」の得点であり、藤井の研究と異なった結果となった。「大学不適応」に関しては、学年が上がる毎に不安得点が高くなる傾向が示されている。

② 本学の退/休学者等の特徴

表8の結果を見ると、退/休学者の半数が調査未実施である。全体の調査未実施者が16%なのに対し、退学者の調査未実施者の割合は50%である。山田(2006)の結果によると、退/休学者の大学不適応が高得点であるこ

と、留年・休学者の大学生かつ不安尺度の低得点が指摘されていたが、本調査では8名の旧退学者の内、高得点者が1名、低得点者が1名であるため、山田の調査結果での傾向が新入生以外の学生及び、本学でも同様の結果がみられるとは言い切れない。ただし、総得点30点（総ての項目で不安であると回答）である学生は283名中2名であり、今後の調査結果で注目していきたい。

表8のNo. 2、3、4、6の学生が共通して選択した項目は、「32 本当に信頼出来る教授にめぐりあえない」であり、3名が共通して選択した項目は「33 大学内にもっと精神的な支えが欲しい」である。尚、No. 2、3、4の学年で「32 本当に信頼出来る教授にめぐりあえない」を選択した学生は38名（48%）で、「33 大学内にもっと精神的な支えが欲しい」を選択した学生は24名（30%）である。また、No. 6の学年では「32 本当に信頼出来る教授にめぐりあえない」を選択した学生は18名（25%）、「33 大学内にもっと精神的な支えが欲しい」を選択した学生は16名（22%）である。

6. まとめ

本調査結果からは以下の傾向が示唆された。

- ① 本学の1年生は他大学に比して、不安が低く、大学適応がしやすい状況にある。
- ② 本学では学年を追うごとに大学不適應感が増加する。
- ③ 本学の休・退学者等の学生は新学年早期に欠席が見られる。
- ④ 本学の2～3年生の休・退学者等の学生は「32 本当に信頼出来る教授にめぐりあえない」、「33 大学内にもっと精神的な支えが欲しい」を選択する。

①の理由として、本学で1年生の時から少人数性のゼミがあり、オフィスアワー等の学生が困った時に使えるシステムを導入しており、新入生にとって適応しやすい環境であることが挙げられる。

②の大学不適應感の増加に関しては、専門学科の単科大としての特徴であるのか、新設校の完成年度の特徴であるのか見極めが非常に難しい。

一般的な大学では学年が上がるにつれて授業数が減少して行くが、本学では保育者養成校であるため、実習が多く組み込まれており、カリキュラムの選択肢が少なく、空き時間が少ないというような自由度の低さがある。自由度の低さが大学不適應感に影響していることが考えられる。

また、現4年生は新設1年目ということもあり、上級生不在のため、今後の見通しが常に立ちにくい状況であ

ることが考えられる。特に、学生自身も大学としても初めての就職活動を前に不安が喚起されていることも影響しているだろう。

窪内（2009）は、AO入試者の中には新しい人間関係や学習環境の適応が難しい学生がいることを指摘しており、入学前から特別な支援及び新入生同士が入学前に知り合う場の設定等の支援を提案しているが、本学の3～4年生はAO入試の割合が多学年に比べて多く、新設校であり、見通しが立たないなかで人間関係や学習環境に適応していくのは非常に困難であったため、大学不適應が高いのかもしれない。

3年生・4年生の負担が大きいと、学年が上がると大学不適應感が増加する傾向があるのか、あるいは、新設校であるが故の特徴であるのか、各学年の特徴（AO入試者の割合等）であるのか現段階では判断できない。調査を継続し、②について検討していきたい。

③では、1年生について追調査を行っていないことから「連続した欠席」とは言えないが、調査未実施者（欠席者）が4%と僅かである。この時期に欠席があるというのは、稀だということである。また、2～4年生の休・退学者の約半数に連続した欠席が見られることから、学年に問わず新学期早期の連続した欠席は休・退学等のサインになり得るだろう。

④の2つの項目は、どの程度傾向としてみられるから今後の調査結果を参考にしなくてはならないが、これらの項目は大学内の教員や友人、つまり人間関係の構築に関連がある。退／休学等を選択する学生は新学期早期の段階での欠席が見られること、学年が上がるにつれ、対人関係の希薄さを感じる学生は休・退学に繋がりがややすいことが示唆される。

ただし、本調査から上記の点が本学の特徴として認められると言う訳ではない。そのため、今後調査を重ねて行く中で傾向を探っていきたい。

引用・参考文献

- 藤井義久(1998)「大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討」心理学研究 Vol. 68, No. 6: 441-448
- 服部誠(2009)「09 大学の實力—読売新聞全国調査」読売新聞 東京本社宣伝部
- 池田忠義・吉武清實(2005)「予防教育としての講義『学校生活概論』の実践とその意義」学生相談研究 Vol. 26: 1-12
- 木村真人(2007)「わが国の学生相談に対する援助要請研究の動向と課題」東京成徳大学研究紀要 Vol. 14: 35-50
- 窪内節子(2009)「大学退学とその防止に繋がるこれからの新入生への学生相談的アプローチのあり方」山梨英和大学紀要 Vol. 8: 9-17
- 水野邦夫・田無徹・炭谷将史・多胡陽介(2007)「大学新入生の大学適応を促進する授業プログラムの検討」聖泉大学

紀要 Vol. 15: 125-140

- 森田裕司 (2004) 「新入生対象の講義『キャンパスライフ実践論』の試み」 広島経済大学研究論集 Vol. 2, No. 3: 67-72
- 中島絵美 (2011) 「学生相談のあり方と取り組みの検討」 こども教育宝仙大学紀要 Vol. 2: 45-53
- 中島絵美 (2012) 「時代が学校の特色に応じた学生相談の取り組みの検討—大学生不適應の予防的アプローチ—」 こども教育宝仙大学紀要 Vol. 3: 131-137
- 文部科学省 (2012) 「平成 23 年度学校基本調査」
- 文部科学省 (2009) 「『青少年の現状と施策』平成 21 年度版青少年白書」
- 独立行政法人日本学生支援機構 JASSO(2009) 「大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査(平成 20 年度)」
- 独立行政法人日本学生支援機構 JASSO(2011) 「大学、短期大調査(平成 20 年度)」
- 植村善太郎・小川一美・吉田俊和(2001) 「大学生の適應過程に関する縦断的研究(2)」名古屋大学大学院 教育発達科紀要 Vol. 48: 29-43
- 山田ゆかり (2006) 「大学入学生における適應感の検討」名古屋文理大学紀要 Vol. 6: 29-36